

# 国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所  
〒259-1293 平塚市土屋 2946  
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス  
TEL 0463-59-4111 (内線 2200)

## SHC の文化を育む

道用 大介

### ■SHC の文化は？

「SHC の特徴は？」と聞かれると、緑豊か、開放的、教員が熱心、アクセスが悪い・・・などすぐに色々なことが思い浮かぶが、「SHC の文化は？」と聞かれると、答えがすぐには思い浮かばない。人が集まれば、そこにいろいろな文化が生まれるものである。しかし、このキャンパスにはあまり学生の文化がないように感じられる。

文化がないということはキャンパスでの人の交流が少ないことを示唆しており、卒業後の母校への愛着の低下や長期的な大学のブランド力の低下につながっているのではないだろうか？

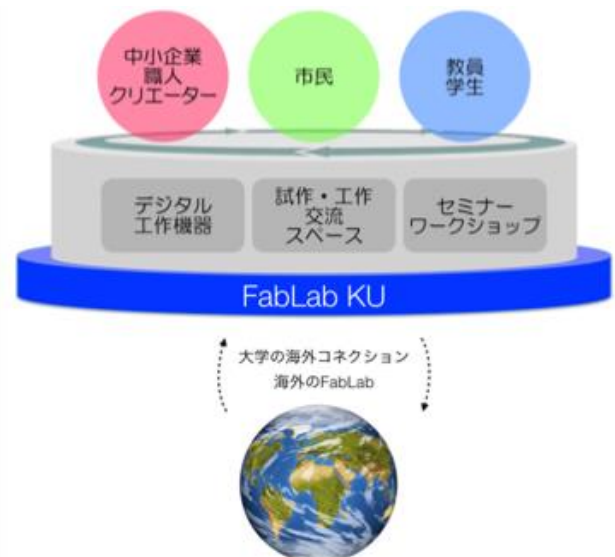
個人的には学長選挙で、マニフェストの1つである SHC の抜本的な再開発を謳った石積学長の具体的な SHC 改革プランを心待ちにしているが、我々 SHC の教職員もどんどんアイデアをだして長期的な視点で“キャンパスの文化”について考えていくべきであろう。私は自分の専門である“生産・ものづくり”という面からこれらの問題について考えていきたい。

### ■Personal Fabrication

極端に分業化された現代社会では自分の手で何かを作り上げる機会が減り、皆が同じようなものを持ち、自分が作ったものへの愛着よりも他者が作った便利さに流されている。私はマルクス主義者というわけではないが、カール・マルクスが「人間は主に生産の努力を通じて、自己の存在を創造する」と述べたことは正しかったように感じる。世の中に流通しているものを選ぶのではなく、「自分が欲しいもの・良いと思うものをつくる」「他者が欲しいもの・好んでくれるものをつくる」プロセスは自分らしさを磨いてくれるであろう。大量生産されたものが溢れた

社会において、自分でものづくりをしてみるという体験は非常に重要である。

実は個人的なものづくりのムーブメントは Personal Fabrication として世界中に広がりつつある。このムーブメントを可能にしているのが、3D プリンタやレーザーカッターなどのデジタル工作機器である。これらの工作機械を置いた工房は FabLab (ファブラボ) とよばれ、世界中に広がっている。アメリカでは堅牢な製造基盤をつくるために FabLab を 10 年以内に 70 万人に 1 つの割合で建設する方針を掲げ、小学校にもデジタル工作機器の導入を進めるなど次世代のものづくりにおける人材育成を進めている。ものづくり先進国として経済発展してきた我が国はこの流れに乗り遅れるのではなく、この流れの先頭を走るべきである。そこで、SHC にも FabLab を設置したいと考え、田中先生、行本先生、山岡先生にもご協力いただき、経済産業省の「地域オープンイノベーション促進事業のうち大学におけるオープンプラットフォーム構築支援事業」に応募した (2014 年 4 月現在審査中)。日本国内に FabLab は 7 カ所あるが、日本の大学キャンパス内には 1 つも



ない。もし、この補助金が採択されてSHCにFabLabを設置できれば日本で初めてのキャンパス内FabLabとなる。

■何でも「やってみる」文化

FabLab 設置の提案は、単に世界の流れに合わせるだけのために行っただけではない。FabLab でのものづくりを通して、SHC の学生達に「やってみる」という習慣をつけてもらいたいという気持ちが強かった。特に経営学部の学生には、実際にやってみるという習慣が足りないと感じていた。思ったことを実際にやってみるという習慣は実行力を養い、アントレプレナーシップを養う。まさに経営に必要な

なことであろう。そして何よりも、想像してみたい。

「キャンパス内の FabLab に地域の市民・企業人・クリエイターが集い、世界中の FabLab と Skype でつながり、それらの人々と学生が交流し、何でも「やってみる」という文化が根付いた活気あるキャンパス」

素晴らしいキャンパスではないだろうか？私は想像力が乏しいので、このようなことぐらしか考えられないが、SHC にいる学生・教職員が夢を描き、「やってみる」を続ければ、きっと色々な文化が生まれてくるであろう。

(所員/どうよう・だいすけ)

=====

**国際経営研究所**

**2014 年度共同研究プロジェクト**

● 新規研究プロジェクト

- ① 経営サイクルを考慮した保有在庫計算ロジックの提案

代表研究者：山崎 友彰

- ② 異文化・国際理解の系譜

代表研究者：吉留 公太

- ③ 環黄海圏の伝統社会の比較研究

代表研究者：李 貞和

- ④ ケーブルテレビ産業の将来展望

代表研究者：関口 博正

- ⑤ 英語学習者の自立学習支援

代表研究者：河内 智子

● 継続研究のプロジェクト

- ① 昭和初期の経営と文化—日本企業のグローバル化と文化・社会状況について

代表研究者：丹野 勲

- ② コーポレート・ガバナンス・コードのEU企業による実践に関する研究

代表研究者：小島 大徳

● 完成年度プロジェクト

- ① 近代社会の成立

代表研究者：後藤 伸

- ② グローバル化社会に対応するレベル別大学英

=====

語教育ストラテジー研究

代表研究者：白石 万紀子

**地域、社会との取り組み**

継続して、平塚市主催セミナーなど産業活性化関連行事の「後援」をしていきます。

**出版活動 昨年度(2013 年)**

- ① 3. 11 が破壊した二つの神話 —原子力安全地震予知』 2014. 3. 31 刊 代表：常石 敬一
- ② 『企業リスクマネジメント』 2014. 3. 31 刊 代表：菅野 正泰
- ③ 『地域経済の再生と中小企業 —地域の時代におけるビジネス創造』 2014. 3. 31 刊 代表：照屋 行雄
- ④ 『国際経営フォーラム』 No.24
- ⑤ 「国経研だより」 No.37. 38. 39. 40

**訃報**

加藤 薫 先生（神奈川大学経営学部教授）

1949 年 3 月 11 日～2014 年 4 月 22 日

SHC 設立時に多大な功績を残されました。

最近の著書に『アイコンとしてのチェ・ゲバラ』 2014. 2 新評論、『黄金郷を求めて』編・訳 2014. 2 丸善出版などがあります。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。合掌

## 商品企画設計とのかかわり

山崎友彰

4月に経営学部へ着任しました山崎友彰です。このたび、国経研だよりにおける研究余滴の執筆依頼をお受けしました。私の研究内容や担当科目について紹介させていただきます。よろしくお願いたします。

研究内容としては、主に生産管理や経営サイクル、商品企画を扱っています。現在、研究の比重を生産管理や経営サイクルから商品企画へシフトさせている段階にあります。

生産管理の分野は幅広く研究されていますが、その業務の大きな流れとしては、需要を予測し、それをもとに設備計画や調達計画を立てます。立てられた計画に基づいて、日々の生産量等を決定する生産計画を立てます。それ

ぞれを実行する段階においては、計画通りに実施するための統制が行われます。これら全ての計画の基本は需要予測にあります。需要予測の精度が高ければ、それ以降の計画は比較的立てやすく、低ければ問題が多発します。多発する問題の解決を目指して研究が数多く行われていますが、分からない未来の需要に対して未来の計画を立案する問題に答えはないように思え、大学時代の指導教員の言葉を借りれば「難しい問題を解いてはならない。問題を簡単にしてから解きなさい」ということを目指すことにひとつの道筋があると考えます。現在の多くの企業が抱える需要予測の精度が低い状況、すなわち解くことが困難な問題状況となってしまうのは計画プロセスや新商品開発にも原因があると強く感じます。

ここからは、私が担当する科目に関係する新商品開発について述べていきます。と言いましても、大方、上記の指導教員の受け売りではありませんが。

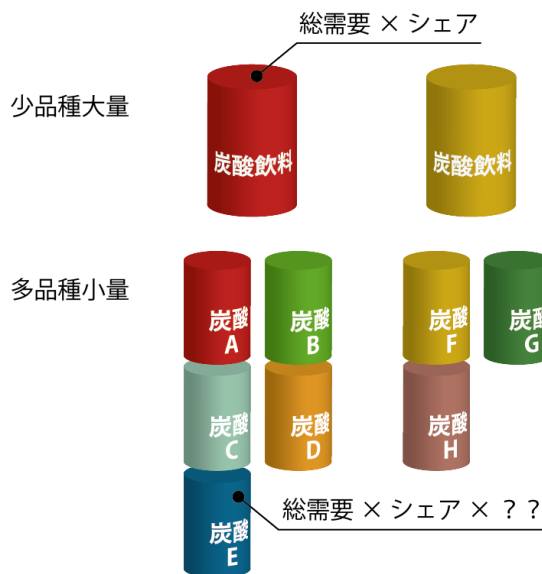
たとえば、少品種大量生産時代における炭酸飲料の需要は、エンゲル係数と人口から算出された炭酸飲料の総需要に市場シェアを掛けるこ

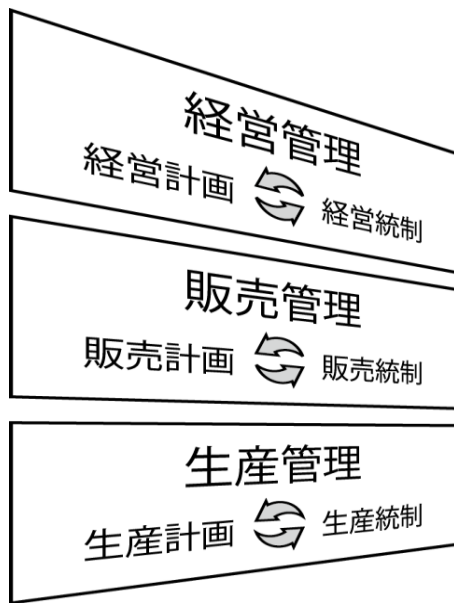
とでおおよその値を求めることが可能です。多くの企業において、需要予測量でのまとめ製造による生産性の向上が図れ、生産管理上の問題は簡単なものになります。これに対して、多品種小量生産が求められる現状では、炭酸飲料の総需要や総市場シェアは先ほどと同様に計算することができますが、炭酸飲料のカテゴリに複数ブランドを持ち、各ブランドの中でも複数の製品があり、競合他社も多数の炭酸飲料を販売しているため、製品別の需要をおおよその値としても予測することが困難になります。たとえ

ば、2012年に市場へ投入された新製品は900弱であるため、1日に2本以上のペースで新製品が開発されています。清涼飲料業界に限らず、多くの

新製品がこうしたペースで開発されれば、開発された各製品の差はどうしても小さくなってしまいます。新たに付加した機能によって売り上げを伸ばすことができた新製品においても、実際には、その機能は小さなもので、開発段階では売り出す側がそれを重視していなかったというケースは多くあります。

### 研究余滴





このような状況においては、需要を予測することは困難であり、解けない問題がさまざまに生じています。清涼飲料業界に話を戻せば、新製品とはほぼ同数の製品が終売となっています。馴染みのある製品の売上が高く、新製品ばかりが購入される状況ではないため、日の目を見ずに市場から消えてしまう新製品は多くあります。これは、企業の開発力に問題があるだけでなく、上にあげた経営サイクルにもその原因があると考えます。

こうした状況を踏まえれば、生産管理や経営サイクル、商品企画を広い視野で眺め、これらに関連させながら問題を定義し、それを解くことが重要であると感じます。実社会で生じるさまざまな問題に貢献することを目指し、今後の教育と研究を進めて行きます。

(所員/やまざき・ともあき)

2014 年度 国際経営研究所活動

講演会、シンポジウム

- 日 時: 2014年6月2日(月)
- 場 所: SHC 1-250 教室
- テーマ: アジアビジネスとその背景  
～商社マンが語る～
- 講演者: 寺村 元伸 氏  
(日本インドネシア協会、専務理事)

出版活動

- ・『国際経営フォーラム』No.25 募集中  
統一テーマ: 「地域の新視点」  
募集期間 : 2014年5月1日～6月30日  
発行予定日: 2014年11月30日
- ・「国経研だより」年4回
- ・成果報告書(プロジェクトペーパー)

常任委員メンバーと役割

- 研究所長 行川 一郎
- 出 版 『国際経営フォーラム』  
小島 大徳  
「国経研だより」  
君島美葵子
- 広 報 ホームページ
- 研究会 講演会・シンポジウム  
泉水 英計  
行本 勢基
- 地域交流事業 行川 一郎



2014 年度 新任の先生紹介

助教 山崎 友彰 経営工学

2014 年度～継続

特任准教授 李 貞和 貿易商務論他  
特任准教授 櫻井 美子 剣道、スポーツ  
マネジメント  
外国人特任助教 セロン・フェアチャイルド  
English Literature

◆2013 年度活動報告

第 6 回産業活性化セミナー

日 時: 2014年3月12日(水)

場 所: 平塚商工会議所

テーマ: 平塚市の潜在力を活かした産業活性化を!! 創造と連携へ

講 師: 清成忠男氏(法政大学元総長)

飯尾紀彦氏(地域デザイン研究所主宰)

編集後記

41号をお届けします。本号では、ものづくりの最新動向と SHC での取り組みについて、道用先生に寄稿いただきました。また、新任の山崎先生には自己紹介を兼ねてご専門の分野について執筆いただきました。ご覧ください。(K) .....